

伝え合う力を育てるための国語科教育の在り方Ⅱ

－「聞く力」を高め合う小中一貫指導計画例の開発－

西村 周

近年、学年進行に伴う国語科の学習意欲や学力の低下が課題とされる中、この課題克服のために小・中9年間を一貫したものとしてとらえて育てていくことが必要であると考えた。本研究では、小中9年間で「伝え合う力」を子どもたちにどのようにつけたいのかを基盤に、「話すこと・聞くこと」の指導と他領域の指導を組み合わせた単元学習を通して、は第2期の子どもたち（小学校第6学年と中学校第1学年）の実践授業を行った。そこで明らかになった結果を改善した上で報告し、国語科における小・中一貫学習指導計画例を提示する。

第1章 国語科教育に基づく伝え合う力

第1節 国語科教育の課題とは何か

文部科学省では、子どもたちの将来を見据えて、人間関係を社会で円滑に結んでいくために必要な「国語力」を学校教育全体で考えていくことを示唆している。

子どもたちの学力実態と学習指導の課題をさぐるために、調査資料等から、子どもたちの「話す・聞く能力」の低下に着目した。

また音声言語能力と文字言語能力の密接な関係、学習内容や学習方法、または授業形態に至るまでの条件を校種間の枠をこえて見直すことが重要だととらえた。小・中9年間の学力の定着を図る目的での学習指導計画が必要であること、またこの課題に迫られている指導者の姿を、学校組織全体で支えていくことが「国語力向上」につながる重要な視点であると考えた。

第2節 「伝え合う力」のある子どもたちを はぐくむために

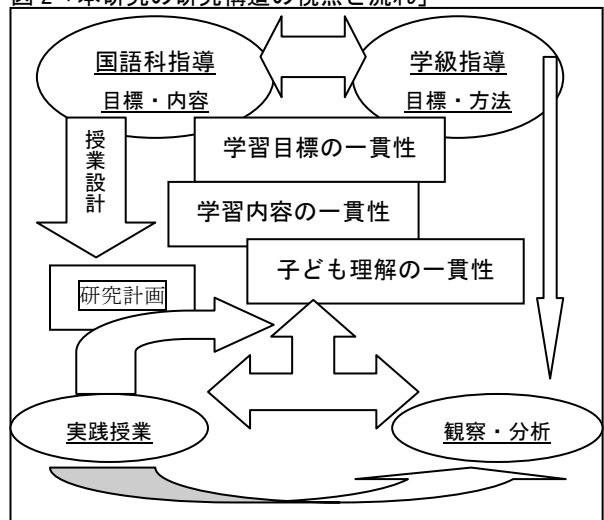
小中9年間で「伝え合う力」を高めるために、どのような活動ができるのかを考えた。「話すこと・聞くこと」領域は表現領域を中心に活動が行われてきた経緯があったことに着目し、「表現活動」のみで「伝え合う力」が育つのかどうかを考えた。子どもたちが表出する言語だけでその力を育てていくのではなく、表出されない言語つまり沈黙にある言語を引き出す指導が必要だと考えた。

図1 『「伝え合う力」を高めるための活動』

- 「聞く」ために「書く」活動
- 「聞く」ために「読む」活動
- 「聞く」ために「話す」活動
- 「書く」ために「聞く」活動
- 「読む」ために「聞く」活動
- 「話す」ために「聞く」活動

「話すこと・聞くこと」領域の理解領域を中心にしたとき、どのような学習活動が行えるのかを考えた。これらの組み合わせから、「理解」と「表現」の間に立つ「伝え合う力」ととらえることが必要だと気づいた。図2は、本研究の構造図である。その目的は、第2期（小学校第5学年～中学校第1学年）「伝えたいことを明確に伝えられる子どもたち」の「伝え合う力」を育てるための研究構造の視点と流れとする。

図2 「本研究の研究構造の視点と流れ」



第2章 小中9年間で育てたい

「伝え合う力」とは何か

第1節 国語科の領域構造を考える

小・中学習指導要領と解説編を読み比べていくことで、「目標の一貫性」「内容の系統性」「指導の継続性」「子ども理解の一貫性」がどのように図れるのかを考えた。昨年度の研究で、小中共通の指導項目を設定したことをさらに、具体的に提示することで、「内容の系統性」と小中の「指導の継続性」が明らかになり、実践できるものととらえた。

表1 「小中9年間『話すこと・聞くこと』領域
(小5～中1) 国語科学習指導要領学年目標一覧表」

学年	話すこと・聞くこと
小学校 第5学年 及び 第6学年	<p>【意識】 考えた事や自分の意図について分かるように話すこと。 相手の意図をつかもうとして聞くこと。</p> <p>【思考】 (理解) 目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。 話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと。</p> <p>【表現】 自分の立場や意図をはっきりさせながら話したり、計画的に話し合うこと。</p>
中学校 第1学年	<p>【意識】 自分の考えを大切に話すこと。 話し手の意図を考えながら話の内容を聞きとること。</p> <p>【思考】 (理解) 自分の考えや気持ちを的確に話すために、ふさわしい話題を選び出すこと。 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話したり聞きとったりすること。</p> <p>【表現】 話し合いの話題や方向をどちらに定めるか、話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめること。</p>

第2節 「聞く力」を焦点化した指導とは

子どもたちの「伝え合う力」を育成するための重点目標は、「理解」領域である「聞く力」と考えたことから、「聞く」ための指導を焦点化した。「聞く意識」と「聞く機能」を考える上で、「ただ静かにしていること」が「聞くこと」ではなく話し手のもつ内面的なものやその話し手の背景にある思いを「聞くこと」こそが、子どもたちにとって、言語学習の場面に大きな役割を果たすのではないかと考えた。具体的には、小学校第1学年～中学校第3学年までの「聞く力」の段階別系統一覧表を開発した。

表2 「小学校第1学年～中学校第3学年 (第II期)
『伝え合う力』－『聞く力』発達段階別系統一覧表」

	聞きとる	聞きならべる	聞きくらべる	聞きまとめる
第II期 (小5～中1)	相手と話の目的や意図を図を考えながら的確に聞く	話の組み立てや順序を論拠を考えながら聞く	話し手の意図と自分の意図または全体と部分、事実と意見との関係をくらべながら聞く	知識を吸収しながら語彙の意味を獲得するように聞く

第3章 小・中一貫した「伝え合う力」を育てるためには何をすべきか

第1節 小学校の実際をさぐる

「聞く力」を高めるためには、「聞くこと」と「書く・読む活動」を組み合わせた学習指導であると考え、「聞きとりメモ学習」(再構成)と「古典の音読・群読」を指導した。「聞きとりメモ学習」は、「聞きまとめる力」を観点に「書くこと」の活動と結ぶことで、子どもたちの内面に「聞く力」を集中させられることがわかった。また「柿山伏」の音読から、子どもたちは、古語のもつ美しい響きを感じとるように「響き合う声で読む」という姿が見られた。

写真1 「語彙の意味を獲得するように聞く」
写真2 「聞き合う学習場面」



第2節 中学校の実際をさぐる

小・中共通の指導項目から、「聞きとりメモ学習」と古典教材「竹取物語」の「音読・群読」指導を行った。「正確に聞きとる」ことだけを「聞きとる」としていた子どもたちにとって、再構成の学習には、意外な反応があった。慣れてくると、単語の量を調節しながら、論理的に書くことができるようになった。古典の音読では、班単位で役割読みをすることで、「聞きくらべる」「聞き合う」活動への意欲の喚起された姿が見られた。

写真3 「話の論拠を考えて聞く」
写真4 「聞きまとめる音読場面」



第4章 「伝え合う力」がつながる

小中一貫教育をめざして

第1節 小中一貫した学習指導計画例の有効性

実践授業をしてみてきづいたのは、子どもたちは「話を聞いたがっている」ということ、そして「聞く機能」は全て「子どもたちの心の耳」につながっているということであった。「聞く力」が発信する「国語力」とは、心の伝言板のようなものだと考える。沈黙をしながらも、話し手の心をつかんで離さない聞き手を育てることが「伝え合う力」を育てる第一歩だと考える。

第2節 小学校・中学校一貫教育の

未来を考える

「聞く」から始める国語科教育の在り方は、子どもたちに直接的に迫る指導だと考える。子どもたちは、自分の思いを確かに受けとめてもらうことのできる学校や家庭の存在を求めている。その存在を知れば、子どもたちが本来もっている「伝え合う力」を限りなく発揮するはずである。小学校・中学校で何をつなぐのかという答えは、子どもたちの魂すなわち心を揺さぶる教材研究に努める指導者の姿そのものに他ならないと考える。